

# 表象としての同性愛——『仮面の告白』とLGBT

柴田勝二（東京外国語大学 大学院国際日本学研究院）

三島由紀夫の出世作として知られる『仮面の告白』を中心として、三島文学における同性愛表象の特質を探るとともに、より近年における同質の主題をはらむ作品に眼を向け、現在問題化されているLGBTとの関わりをも考察するという内容の講義をおこなった。

『仮面の告白』は1949年に発表され、三島を広く表現者として知らしめる契機となった重要な作品である。この作品は異性を愛することができない少年として育った語り手が、中学校時代に近江という年上の同級生に「恋」をし、その後戦争時に知り合った園子という女性とありふれた異性愛の関係になるものの、異性に欲望を感じるができない自身の資質のために結局彼女とは離別に至ってしまうという展開をもっている。

『仮面の告白』が同性愛を主題とする作品であることはごく自明のように見えながら、自身が前半部分で語るような宿命的な同性愛者であるならば、そもそも園子と異性愛の関係に入るはずがないという矛盾をはらんでいる。けれども三島——語り手のなかにある動機としての基調は、現実世界を生き抜く生命感の欠如であり、それを回復しようとする強い志向である。近江は自身にはない生命の力を漲らせた存在として語り手の「私」を引きつけるのであり、またその欠如ゆえに彼は園子との異性愛を成就させるに至らないと考えることができる。本作品において同性愛と異性愛が反転する様相を呈しているのはそのためであり、破綻した異性愛を正当化するべく、同性愛者の「仮面」が求められているのである。

その3年後に発表された『禁色』は、『仮面の告白』とは違って同性に憧れるというよりも、異性愛と同性愛のどちらの世界にも生きうる美青年を主人公とし、現実には彼が同性と性的な交わりを交わしもする様相を描いている。こうした現実を超越しうる強者的な人物を描くことがこの時期の三島の傾向として見られるが、この作品では同性に牽引される情動が希薄であるために、主人公は同性愛の主体というよりも「男色家」としての性格を強く帯びている。

文学における同性愛表象について考える際に、『仮面の告白』の「私」を動かしているような憧憬の感情は重要な意味をもっている。とくに吉屋信子の『花物語』や谷崎潤一郎の『卍』といった、大正から昭和初期の時代に現れる女性間同性愛を主題とする作品においては、しばしばこの感情が基調をなしている。すなわちこうした作品においては、女性の美が社会的な価値を高め、また「玉の輿」以外にも前代に比べれば社会における女性の自己実現がある程度可能になってきた時代を背景として、そうした資質を持つ女性を自身の指針として生きようとする情動が、同性への憧憬という形を取り、さらには性的な愛着さえ派生させることが自然に起こってくる様が描かれるからである。

こうした傾向は現代文学にも受け継がれ、松浦理英子の『ナチュラル・ウーマン』では、同性

に性的に惹かれることを自然な情動として受け止める女性が描かれる。これらの作品は、同性に対する憧憬の感情が性的な色合いを帯びた地点に同性愛が発生する機構をよく示しているといえるだろう。『仮面の告白』はこの機構を原理的な形で物語っている作品とも見なされる。こうした関係が男性間よりも女性間で起こりがちなのは、社会的な自己実現の競争の主体となるのが、女性よりも男性の方により強く想定されるために、優れた資質を持つ同性は男性にとっては憧れよりも敵意や競争心の源泉となりやすいからであろう。それに対して女性にとっては、近代においても社会的地平での自己実現から遠ざけられがちであったために、それをなしうる可能性をはらんだ女性は同性に同士の共感をもたらす契機ともなる。

こうした機構はフロイトの同性愛理論からもうかがわれる。フロイトは同性愛を発生させる機縁として、自己愛の外部への投影に加えて同性に対する競争意識の脱落を挙げているが、男性間よりもむしろ女性間の同性愛を描く作品の方が、女性の社会的地位の相対的な低さと相まって、競争意識の希薄さを契機とする同性愛の様相を提示することが少なくないのである。反対象を競争の地平に置いて眺める眼差しは同性愛的な心性を阻害する装置として機能しやすい。その点でも『仮面の告白』は示唆的な作品で、語り手の「私」は前半部分では完全な同性愛者のように一見見えながら、実は異性愛的な心性をはらんでおり、それが後半の園子との異性愛関係の伏線ともなっている。彼が同性に惹かれずと語りながらも、松旭斎天勝という女性奇術師に魅惑を感じるのはその一端をなしている。また中学校時代、近江が鉄棒で力強い懸垂を繰り返す様を見て、彼への「愛を自ら諦めたほどの強烈な嫉妬」を抱くのは、「私」のなかにある異性愛者的な資質が近江を競争の地平に置いたうえで、自身の敗北を痛感させられたからにほかならない。

もちろん同性への憧憬を動機としない肉体的交渉としての同性愛関係が表象される文学作品も少なくない。比留間久夫の『YES・YES・YES』では、男娼として客に体を売る青年の話が語られるが、彼にとっては同性との交渉はあくまでも商売であるにすぎず、その点ではこの作品を「同性愛」を描くものとしては見なしがたい。三島の『禁色』の主人公南悠一も同性愛者というよりも男色家というべき性格を持っていたが、この作品では中盤以降、悠一は異性愛者としての自己に目覚めていき、むしろ彼を女への復讐の道具としようとした老作家の檜俊輔の方が悠一への愛着を強めていくというアイロニカルな展開を示しており、やはり同性愛の根底にある情動の形が暗示されている。

現代の LGBT に関する調査では、同性愛の傾向を持つ人びとは、女性の場合は父親から受けた暴力の経験が男性への恐怖や嫌悪をもたらしたことが起点となることが多く、男性の場合は競争社会で自己表現をうまくできないことが原因をなすことが多いようである。こうした心性は人間にとって自然なものであり、これまで文学作品に描かれてきた動機とも連続性を持っている。その連続性に着目することで、一見距離のある文学作品の表象と現実社会における現象としての LGBT を架橋することもでき、そうした包括的な視点から同性愛表象を捉える必要があるだろう。